

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 17 日現在

機関番号：34310

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26885069

研究課題名(和文) 脱北女性の「脱北過程経験」と韓国社会への適応に関する社会学的考察

研究課題名(英文) A Sociological Study on "Escape Process Experience" of North Korean Refugee Women and Adaptation in Korean Society

研究代表者

尹 珍喜 (YOON, JINHEE)

同志社大学・社会学部・准教授

研究者番号：60732253

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、北朝鮮を離れて韓国に定着した脱北女性の脱北過程の特徴を明らかにすることを目的に、韓国に在住する20代～40代の脱北女性のライフヒストリー調査を実施した。

その結果、近年、脱北女性の脱北動機は、より安定的な生活や自由を求めたり、子供の将来への期待といった動機の多様化が窺えた。また、中国への一時的な出稼ぎを目的とする従来の脱北形態から、最初から韓国行きを目的とする脱北の目的地への変化が見られた。その背景には、北朝鮮内における韓国社会への認識の変化とともに、すでに韓国に定着した脱北者からの情報及び経済的なサポートが存在する。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to clarify the characteristics of the Escape Process of North Korean refugee women. I examined North Korean refugee women aged 20 to 40 who settled in South Korea using the life history interview method.

From the said interview, we have identified that the North Korean women have diversity of motivations such as stability of their life and educational freedom for their children. In addition, it also seems that North Korean women went from the traditional idea of working shortly in China to permanent immigration to South Korea. It seems to be the cause is not only changes in the recognition of the Korean society in the North Korea, but also information and economic support from their relatives who have settled in South Korea.

研究分野：家族社会学

キーワード：女性脱北者 脱北過程経験 韓国社会への適応

1. 研究開始当初の背景

朝鮮民主主義人民共和国 (以下、北朝鮮) を離脱して韓国に居住している者、いわゆる「脱北者」は、北朝鮮の食糧難が深刻化した1990年代後半から急増し、2014年にはその累積人数が約2万7千人に達している(統一部)。特に、2000年代以降の脱北者における大きな特徴は、女性脱北者の割合の高さである。それゆえ、女性脱北者の増加原因、脱北過程の特徴、韓国社会への適応に関する社会的かつ学術的関心が高まっており、特に女性脱北者の脱北過程における性的搾取や人権的被害、家族をめぐる問題に注目した研究が増えている(趙・全, 2005; 李ほか, 2009; 李, 2011)。

これまで韓国に入国する女性脱北者の特徴は、北朝鮮居住時の経済的困難を乗り越えるために中国に出稼ぎ目的で脱北し、そこで長期間滞在をするとされてきた。しかし、近年、女性脱北者の脱北動機や脱北過程においても変化が見られ始めている。つまり、経済的困難や中国での出稼ぎを目的としない脱北動機が増え続けているのである(脱北女性連帯, 2011)。

2. 研究の目的

そこで本研究では、近年、北朝鮮を離れて韓国に定着した女性脱北者の脱北動機について、彼女たちの脱北過程と家族形成に注意を払いながら、その実態を明らかにすることを目的とする。

3. 研究の方法

2014年、現在、韓国に在住する女性脱北者に聞き取り調査を実施し、そのデータを用いて分析を行った。対象者の選定基準は、近年の脱北動向を探るため、2005年以降に北朝鮮を離脱し、韓国に定着してから1年以上経つ20代~40代の女性脱北者と限定した。対象者の基本属性については、[表1]を参照されたい。対象者へのアクセスは、まずは韓国内外で北朝鮮に関連する支援を行っているNGO団体に脱北者の紹介を依頼し、さらにインタビューに応じた対象者に知人の脱北者を紹介してもらうスノーボール方式を併用した。

名前	年齢	出身地	脱北時期	韓国入国時期	朝中韓における結婚/子どもの有無
1. Aさん	42歳	两江道	2009年	2010年	朝: 結婚(離別)/息子1人 再婚(離婚)/息子1人 中: 無 韓: 無
2. Bさん	45歳	两江道	2009年	2010年	朝: 結婚(死別)/娘1人 中: 無 韓: 結婚(朝鮮族、離婚)
3. Cさん	39歳	两江道	2009年	2010年	朝: 結婚/息子1人 中: 無 韓: 離婚調停中
4. Dさん	28歳	咸鏡北道	2009年	2010年	朝: 無 中: 無 韓: 結婚(北朝鮮)/息子2人

[表1] 調査対象者の基本属性

調査方法は、調査者があらかじめ用意した質問をもとに、対象者の語りの流れによって質問の内容を調整していく半構造化インタビューを行った。質問内容は、対象者が北朝鮮にいた頃から現在に至るまでのライフヒストリーを語ってもらった。具体的には、①進学、就職、結婚、出産といったライフイベントでの出来事、②脱北を決心した動機と韓国に入国するまでの脱北過程、③韓国社会での適応、家族関係、将来への希望を尋ねた。調査の終了後、対象者の同意のもとに行った録音データを文字データに変換し、分析を行った。

4. 研究成果

(1) 脱北動機の多様化

これまでの脱北者研究において、1990年代後半からの脱北者における主な脱北動機は、従来の政治的動機ではなく、生活の困難という経済的な理由によるものであると指摘されてきた(尹, 2004)。ところが、近年における脱北者の脱北動機は、さらに多様化している様子が見られる。例えば、2012年に北韓離脱住民支援財団で実施した実態調査によると、脱北者の脱北動機(複数応答)で、「食料不足と経済的困難」による脱北(52.8%)のみならず、「自由のために」(32%)、「北朝鮮の体制への不満」(23.6%)、「お金を稼ぐため」(19.0%)、「家族の説得」(15.0%)、「離れた家族を探すため」(9.4%)、「身の危険のため」(9.4%)というように多様化している。本研究で聞き取り調査を行った対象者も同様に、生活の困難にのみ還元できない脱北動機を見いだすことができた。

① 安定的な生活を目指しての脱北

Aさんの場合、中国から密輸したお皿の販売が成功し、食糧難で厳しかった時期にもゆとりのある生活ができたという。彼女の脱北動機は、生活の困難ではなく「自由を束縛する」ためであったと述べている。

Aさん: 草のおかゆも食べられなくて貧しかった時、私たちはむしろお金を稼いで豊かでした。(略) だけど、この話をするとみんななぜここ(=韓国)に来たのかと言うんですよ。北朝鮮ではあまりにも人を制限しちゃうからね。

またBさんも、夫との死別後、軍部隊の事務管理や家族管理で生計を立てており、比較的安定的な生活をしていたが、常に保衛部などに賄賂を渡さなければならない状態に不安を抱いていたという。彼女は、今よりも安定的な生活を目指して脱北を決心したのである。

このように、近年の女性脱北者の脱北動機には、より安定的な生活や行動の自由を求めると、従来指摘されてきたそれとは異なる

動機が窺える。

② 子どもの将来のための脱北

多様化する脱北動機において、特に注目されるのが「子供の将来のため」という意味づけである。北朝鮮では、経済的困窮の影響で就学状況が悪化し、多数の教員や児童・生徒・学生が学校を離脱する状況に陥った。政府は、「平等主義」から「実利主義」へと教育方針を転換して教育の正常化のための努力を行ってきた。しかし、公教育費の減少による私教育費の負担の増加、中等学校の序列化による入試をめぐる不正や賄賂の蔓延など、教育機会への格差がより広がってきた（李ほか、2007）。それゆえ、女性脱北者の中では、現在の北朝鮮の教育システムでは自らの子どもに適切な教育を受けさせることができないという認識が広がっている。Bさんは、当初は中国で娘を勉強させるつもりで脱北を決断したが、現在は韓国に入国し、韓国の大学に娘を進学させている。彼女が韓国に入国することを決心したのは、子どもにより良い教育の機会を与えられるからである。

Bさん：中国で暮らしながら子どもを勉強させるという考えでした。（略）子どもをどうにか勉強させたくて（北朝鮮を）出たわけであって、それ以外は特に考えがなかったです。（略）私は、子どものために脱北したので、子どもに良いかどうか、私にとって一番重要です。

一方、Cさんの場合、北朝鮮では親の身分や職業によって子どもの将来も決まってしまうという身分制に対する失意、さらに、子どもの生命さえも脅かされる状況から、息子に未来の機会を与えるために脱北を選択した。

以上のように、近年の女性脱北者の脱北動機は、食糧難による生活の困難という一時的な理由の他に、より長期的で多様な理由による脱北が看取され、特に子どもの将来に対する願望による脱北が目立つようになった。

(2) 韓国行きを目的としての脱北

女性脱北者において注目に値する2つ目の特徴は、脱北先の変化である。従来の脱北者研究においては、脱北者の多くは、最初は中国への一時的な出稼ぎを目的とする場合が多いと指摘されていた。しかし、近年における脱北動機の変化とともに、脱北当初から韓国行きを目的とし、中国には長期間滞在しない脱北が増え続けている。このような脱北過程に対して韓国在住の脱北者は「直行」と呼んでいる。

① 韓国に対する認識の変化

韓国を目的地とした脱北が増えた背景には、中国と隣接する北朝鮮国内を中心に、韓

国に対する認識が変化していることが挙げられる。

Cさんは、中国と隣接した地域で商売をすす中で韓国に関する情報を得ており、韓国が北朝鮮よりも豊かな生活をしていることに気づいたという。

Cさん：中国とつながって（＝商売して）いるでしょう。そのときに、韓国に関する噂をたくさん聞きました。（略）今はみんな韓国について知っています。知っているけど言えないだけでね、口にすると捕まるから。みんな知っています、韓国の方が豊かに暮らしているのは。

北朝鮮では、韓国についての情報流入も厳しく制限されている。しかし、非合法ながらも市場経済が蔓延していくにつれて、中国から韓国製品や韓国のドラマ・映画・音楽などが北朝鮮国内に浸潤するようになってきた。こうして北朝鮮の一部の人々は、北朝鮮政府が作り上げる韓国像とは異なる韓国の実態に触れ、韓国への好奇心や強いあこがれを抱くようになってきている。Dさんは、鉄道員の仕事に配属されていたが、移動が多い仕事であるため外の文物に触れるチャンスが多かったという。その中、韓国ドラマを入手して友達と隠れて見たという。

このように、中国経由で流入している韓国の情報や製品、文化アイテムを通じた韓国経験という衝撃は、脱北への重要な契機として働いていることが窺える。

② 韓国に定着した脱北者からの情報

また、一足早く北朝鮮を離れて韓国に定着した脱北者の存在は、北朝鮮の中に韓国に関する情報が入りやすくなった背景となっている。韓国に在住する脱北者の多くは、中国や北朝鮮にいるブローカーを利用して、北朝鮮に残した家族と連絡を取り合い、経済的な支援を行っている。さらに、彼ら・彼女らは、北朝鮮の家族を韓国へ呼び寄せるために多くの努力を行っており、家族を説得する過程で、中国での不法滞在者としての境遇、韓国政府からの補助金や住宅手当、韓国での生活事情、脱北過程やルートなど、具体的な情報を伝達する。このように先に脱北に成功した家族からの情報の広がりにより、当初から韓国行きを試みる脱北が増えてきているのである。

Aさんは、脱北して韓国に定着した元夫から10年ぶりに連絡があり、息子の将来のために韓国行きの脱北を勧められた。実際に、夫から仕送りをもらう中で、長男を韓国へ送ることを決心し、その後、自身も次男と一緒に脱北を実行した。当初より韓国を目指した脱北を決心できたのは、元夫の説得とサポートがあったからである。一方、韓国在住の脱北者の北朝鮮の家族への金銭的支援は、北朝鮮内で韓国に対する過剰なあこがれをもた

らしてしまったと、Bさんは次のように述べる。

Aさん：結局、北朝鮮（の人）が一番あこがれるのは韓国です。韓国へ行くと、みんな金持ちになれると思っています。（略）そうやって（韓国にいる）脱北者が北朝鮮（にいる家族）と連絡するようになって、韓国に対するあこがれが高まったのです。

このように、韓国に定着した脱北者の北朝鮮国内への様々な情報提供や経済的な支援は、韓国に対する実態的な認識変化を誘っている一方、「韓国へ行くと、みんな金持ちになれる」といった韓国に対する間違っただけの幻想をもたらしている側面も存在する。

(3) まとめ

本研究で得られた知見は、以下の通りである。まず、本研究での韓国在住の女性脱北者の脱北動機は、従来の政治的理由や生活の困難に還元できない脱北動機の多様化が窺われる。具体的には、より安定的な生活や行動の自由を求めたり、子供の将来を考慮したりしたことを理由に脱北している。

こうした脱北動機の多様化が見られる中で、特に「直行」の登場は注目に値する。つまり、長期の中国滞在が典型とされた従来の脱北形態から、当初から韓国行きを目的としており、中国滞在はごく短期間である。その背景には、北朝鮮の一部において韓国社会の認識の変化がみられることに加えて、すでに韓国に脱北をしている家族から北朝鮮に残された家族に伝えられる情報がインパクトを持って受け入れられている実態がある。その意味で脱北過程における「直行」の登場は、脱北という人的移動の動向に大きな変化をもたらす端緒となる可能性がある。

<引用文献>

- ① 李キョドク・林スンヒ・趙ジョンア・李キドン・李ヨンフン, 2007, 『脱北者の証言からみた北朝鮮の変化』統一研究院. (=이교덕・임순희・조정아・이기동・이영훈, 2007, 『새터민의 증언으로 본 북한의 변화』통일연구원.)
- ② 李スンヒョン・金チャンデ・ジンミジョン, 2009, 『脱北者の家族解体と再構成』ソウル大学校出版文化院. (=이순형・김창대・진미정, 2009, 『탈북민의 가족 해체와 재구성』서울대학교출판문화원.)
- ③ 李ファジン, 2011, 「女性脱北者の異性関係を通してみた人権侵害構造と対応——脱北及び定着過程を中心に」『平和研究』秋号: 376-404. (=이화진, 2011, 「탈북여성의 이성 관계를 통해본 인권침해 구조와 대응——탈북 및 정착과정을 중심으로」『평화연구』가을호: 376-404.)

- ④ 北韓離脱住民支援財団, 2012, 『2012 北韓離脱住民実態調査』. (=북한이탈주민지원재단, 2012, 『2012 북한이탈주민 실태조사』.)
- ⑤ 脱北女性連帯, 2011, 『脱北女性の人生と生涯』. (=탈북여성연대, 2011, 『탈북여성의 삶과 생애』.)
- ⑥ 趙ヨンア・全ウテク, 2005, 「女性脱北者の韓国社会適応 問題——結婚経験者を中心に」『韓国心理学会誌』10(1): 17-35. (=조영아・전우택, 2005, 「탈북여성들의 남한 사회 적응 문제——결혼경험자를 중심으로」『한국심리학회지』10(1): 17-35.)
- ⑦ 統一部, 『北韓離脱住民政策』(<http://www.unikorea.go.kr>). (= 통일부 『북한이탈주민정책』.)
- ⑧ 尹ヨサン, 2004, 「在外脱北者 実態—現況と代案を中心に」, 『第7期北韓人權難民問題アカデミー資料集』北韓人權市民連合. (=윤여상, 2004, 「재외탈북자 실태-현황과 대안을 중심으로」『제 7 기 북한인권난민문제 아카데미자료집』북한인권시민연합.)

5. 主な発表論文等

[雑誌論文] (計1件)

- ① 尹 鈺喜、近年の脱北者における脱北動機の多様化と「直行」: 韓国在住の女性脱北者へのインタビュー分析から、北東アジア研究、査読有、第26号、2015年、pp.51-61.

[学会発表] (計2件)

- ① 尹 鈺喜、女性脱北者における結婚と生存戦略、日本家族社会学会第25回大会、2015年9月23日、追手門学院大学(大阪府・茨木市)。
- ② 尹 鈺喜、女性脱北者における結婚経験——家族形成をめぐる生存戦略、教育文化学会第25回大会、2015年9月5日、同志社大学(京都府・京都市)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

尹 珍喜 (YOON, Jin-Hee)
同志社大学・社会学部・准教授
研究者番号: 60732253